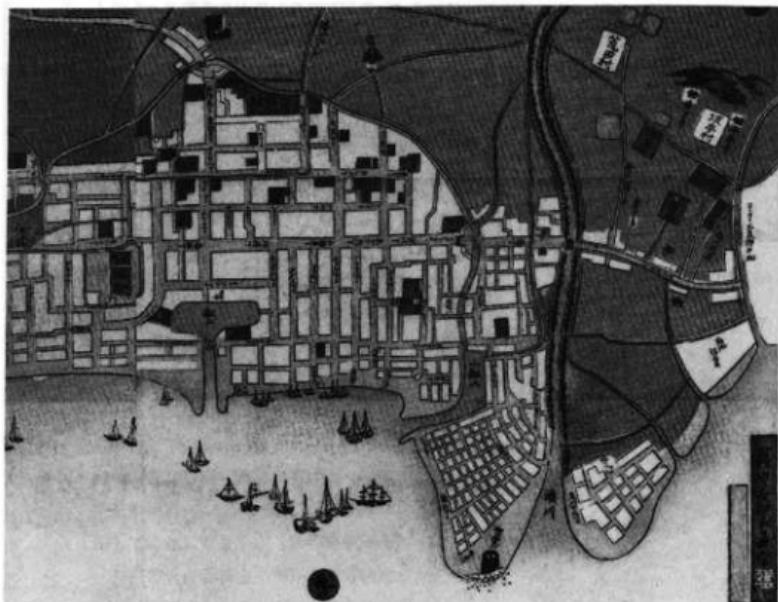


神戸ハーバーランド遺跡



(兵庫縣見図 明治2年 神戸市立博物館蔵から)

1987.8

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市中央区東川崎町1丁目に所在する神戸ハーバーランド遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本住宅・都市整備公団の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。昭和62年7月11日から7月23日までの8日間を調査に費やした。
3. 発掘調査は、兵庫県教育委員会が調査主体となり、社会教育・文化財調査技術職員渡辺昇・山上雅弘が担当した。
4. 調査にあたっては、鍛山田工務店に作業委託をして実施した。
5. 本書で示す標高値は神戸市設定のB.M.を使用した値で、方位は磁北である。併せて基準点測量も実施した。
6. 遺構写真ならびに遺物写真は、調査員が撮影した。ただし、図版1の空中写真は国土地理院のものを使用した。
7. 整理作業は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所で行った。
8. 整理作業は、調査員と渡辺裕子（関西大学文学部学生）が行い、執筆も3名で分担し、山上が本書の構成を行った。
9. 本報告にかかるスライドなどの資料は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）に保管してある。また、出土遺物は兵庫県埋蔵文化財調査事務所と兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に保管してある。
10. 発掘調査ならびに整理作業にあたって、下記の機関・方々から多大な教示を得た。記して感謝致します。（敬称略順不同）
神戸市教育委員会・神戸市立博物館
神戸市都市計画局・西日本旅客鉄道株式会社神戸駅・淡路屋・山本宇商店・鎮台窯
神戸商船大学教授 北野耕平・同左
松木 哲・船津重次・神戸市立博物館 三好唯義・淡路屋 入江康之・はぎのや
萩山敏治・飼森永乳業 武藤潤隆・共進牛乳 中尾作蔵・松浦商店 山内利行



図1 神戸市の位置

本文目次

例　言

I はじめに

- | | |
|------------|---|
| 1. 調査に至る経緯 | 1 |
| 2. 発掘調査の経過 | 2 |
| 3. 整理作業の経過 | 4 |

II 位置と環境

III 調査結果

- | | |
|----------|----|
| 1. Aトレンチ | 8 |
| 2. Bトレンチ | 10 |

IV 出土遺物

- | | |
|---------------|----|
| 1. 船材・その他の木製品 | 12 |
| 2. 陶磁器など | 16 |
| 3. 砥石・瓦 | 18 |
| 4. 駅弁関係資料 | 19 |

V おわりに

図版目次

図版1	遺跡周辺空中写真 (国土地理院撮影)	図版5 (上) 桁状遺構内部(北から) (下) 桁状遺構 南東隅
図版2 (上)	調査前全景	図版6 船材・その他の木製品(1)
	(左) Aトレンチ全景(東から)	図版7 (上) 船材・その他の木製品(2) (下) 船材・その他の木製品部分
	Bトレンチ全景(西から)	
図版3 (上)	Aトレンチ砂堆断面 (南から)	図版8 出土遺物(陶磁器・砥石)
	(下) Bトレンチ砂堆と耕作面 (北から)	図版9 出土遺物(ガラス瓶)
		図版10 出土遺物(駅弁関係資料)
図版4 (上)	桁状遺構全景(北から)	
	(下) 桁状遺構全景(西から)	

I はじめに

1. 調査に至る経緯

神戸ハーバーランド遺跡は、神戸市中央区東川崎町1丁目に所在する遺跡で、古くから知られている遺跡ではない。しかし、当地周辺は『兵庫の津』の存在が推定されている地域ではあった。福原京の問題をはじめとして中世以降の神戸特に港湾関係の歴史を考える上に必要不可欠な存在である。

神戸ハーバーランド計画は、旧国鉄湊川貨物駅跡地を利用して、商業・住宅・文化・情報・教育・業務施設を建設し、多目的に活用される新しい神戸の核となるべき地域の新設計画である。神戸市の都市計画のマスタープランにおいては、三宮から神戸駅周辺の都心商業軸と大倉山から神戸ハーバーランドの神戸文化軸の接点となる部分であったが、貨物駅によって発展の余地が少ないことから停滞していた。神戸ハーバーランド計画により、その問題も解消し発展の期待が高まってきた。昭和57年国鉄湊川貨物駅廃止が決定してから利用計画が策定され、具体的に事業が進められている。事業計画対象地は、23haの広大な面積に及ぶ。

神戸ハーバーランド計画用地の一部は、神戸市教育委員会発行の『神戸市文化財分布図』(昭和62年3月)に中央区625地点散布地として記載されている遺跡である。また、旧湊川



図2 遺跡周辺図（明治14年2月兵庫神戸実測図・神戸市立博物館蔵）

以西の海岸線には『兵庫の津』の存在が推定されており、兵庫区⁵24地点として挙げられている。『兵庫の津』は、日宋貿易をはじめとして神戸の基となる海運関係の遺跡である。古代律令制の五泊の一つである大輪田泊の推定地でもある。それら遺跡も該当地域西側に広がっている可能性があるため、調査の必要が訴えられていた。

昭和60年度は、神戸市教育委員会によって確認調査が実施された。9本のトレンチ調査の結果、咲群状遺構・畝状遺構が確認されている。昭和61年度も神戸市教育委員会によって都市計画部分の確認調査が行われ、日本住宅・都市整備公団事業部分については兵庫県教育委員会が対応することとなり、立会い調査を2次にわたり実施した。その結果、江戸時代の畑作遺構が確認されたので、確認調査を行うこととなり、翌年度実施することとなった。

発掘調査は、昭和62年7月13日から7月23日までの実働6日間確認調査を実施した。日本住宅・都市整備公団と委託契約を結び、鶴山田工務店に作業委託して行った。東西方向に2本トレンチを設定して550m²の確認調査を行った。

整理作業は同一年度内に実施することとし、兵庫県埋蔵文化財調査事務所で行った。出土遺物が特殊なものであったため、多数の方々に多大の教示を得た。

2. 発掘調査の経過

昭和62年度当初から調査時期などについて協議を重ねてきた。調査計画や用地問題などから7月上旬に確認調査を実施することになった。7月6日に作業委託の入札を行い、鶴山田工務店が落札した。7月9日現地において日本住宅・都市整備公団、神戸市都市計画局、鶴山田工務店、兵庫県教育委員会の4者により、用地幅杭の確認を行う。その後、調査地点の測量を行い、調査準備にかかる。

調査地点は、昨年度の立会い調査で現地表下約1.3mは遺構がないことが判明しているので、重機掘削を行った。国鉄建物関係のコンクリートや廃材が投棄されている以外は、砂質の盛土であるため、崩壊を防ぐため法面を設けて掘り下げた。その下の層も砂で崩壊しやすい堆積土であるため、5m幅で機械掘削を行った後、中央の3mを深掘する二段掘りの方法を採った。確認調査は、トレンチによる確認調査で5m幅のトレンチを2本平行に設定した。旧地形にはほぼ即して等高線に直交するように、また調査面積が広く取れるように東西方向に設定した。北側をAトレンチとし50mの長さに、南側をBトレンチとし60mの長さにした。

調査は、1.3m以下を人力掘削した。水田・畑を2面検出したのち、さらに水田・畑が確認されなかった部分はサブトレンチを設けて0.5m幅で掘り下げた。Bトレンチ中央付近で木組みの遺構が検出されたので、一部拡張して調査を行った。調査は昭和62年7月11日から7月23日まで実施した。実働は8日間である。

調査の組織

調査は日本住宅・都市整備公団関西支社の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となつた。

調査事務 社会教育・文化財課

課 長	北村 幸久
文化財担当参事	森崎 理一
副課長	黒田賢一郎
課長補佐	福田 至宏
課長補佐兼埋蔵文化財調査係長	大村 敬通
管理係長	山口 幸作
主 査	池田 正男
主 査	小川 良太
主 任	岡田 章一
主 任	松本 豊彦
事務職員	小林 亮介



図3 調査風景

調査担当 社会教育・文化財課

主任	渡辺 昇
技術職員	山上 雅弘
補助員	渡辺 裕子（関西大学文学部史学地理学科）
作業委託	株式会社 山田工務店現場代理人 柳田 邦彦

調査日誌

昭和62年7月11日（土）曇り	7月14日（火）・15日（水）雨
Aトレーニチ機械掘削始める。5m幅で掘削し、 排土は北側に置く。	降雨のため、作業中止。
7月13日（月）曇り	7月16日（木）曇りのち雨
Aトレーニチ機械掘削後、Bトレーニチ機械掘削 開始する。Aトレーニチにベルトコンベア並べ、 人力掘削上層水田面まで掘り下げ始める。ト レンチ東側に写真用足場固定する。	Aトレーニチ上層水田面まで掘り下げ全景写真 撮影。平板測量を行う。さらに掘り下げるが、 土壊化した土層なく、遺構認められない。ト レンチ位置図作成する。
	7月17日（金）雨

降雨のため、人力掘削中止。標高を基準点から引っ張ってくる。

7月18日（土）雨

降雨のため、人力掘削中止。トレンチの基準点測量を行う。

7月20日（月）曇り

A トレンチ土層断面図作成。B トレンチ上層水田面撮影後、振り下げ継続。木組み検出する。

7月21日（火）曇り

A トレンチ埋め戻し作業バックホーとブルドーザーを使って始める。B トレンチ木組み遺構全体検出するため、一部拡張する。清掃後、写真撮影。実測を行う。南壁断面清掃し、断面検討する。

7月22日（水）曇り時々晴れ

A トレンチ埋め戻し作業転圧作業も行い終了する。B トレンチ樹状遺構（船入り）断面図作成、部分写真撮影後、木材取り上げる。大形の材は全て船の転用材であった。船材を兵庫県埋蔵文化財調査事務所に搬入する。

B トレンチ南壁断面実測し、作業終了する。器材など搬出。

7月23日（木）晴れ

B トレンチ埋め戻し作業バックホーとブルドーザーを使って始める。跡片付けを行い、撤去準備。コンテナハウスなど搬出する。

7月24日（金）晴れ

B トレンチ埋め戻し作業転圧作業も行い終了する。管理引き継ぎを行い、全ての作業終了する。



図4 調査風景

3. 整理作業の経過

調査終了後、遺物など兵庫県埋蔵文化財調査事務所へ搬入し、直ちに整理作業に入った。発掘調査の委託経費が余ったので、それを整理費および報告書の印刷費に当てるとした。整理作業は、主に兵庫県埋蔵文化財調査事務所で行ったが、一部住吉宮町調査事務所で実施した。特殊な出土品のため、多くの方々の教示を得た。一部、埋蔵文化財の分野を逸脱している可能性もあるのではと思われたが、あくまで出土した遺物であると考え、与えられた期間内で最大限の努力をして行った。ただ、最後のまとめの段階で整理作業・報告書作成を主に担当した山上から引き継いだため、詰めが甘くなかったかもしれません、同じ担当者として遺漏がないか危惧するものである。

船材の保存処理は実施していないが、その現状での保護について兵庫県教育委員会社会教育

・文化財課主任加古千恵子・同技術職員別府洋二ならびに増田 啓・水島正稔・中島雄二各氏の指導・協力を得た。また、船材の樹種鑑定は別府洋二がプレバラートを作成し、京都大学木材研究所島地 謙名譽教授に鑑定戴いた。整理作業は、実測・トレースを山上・渡辺裕子が、船材の遺物写真を山上が、その他の遺物写真を渡辺が行い、編集は渡辺が主担した。

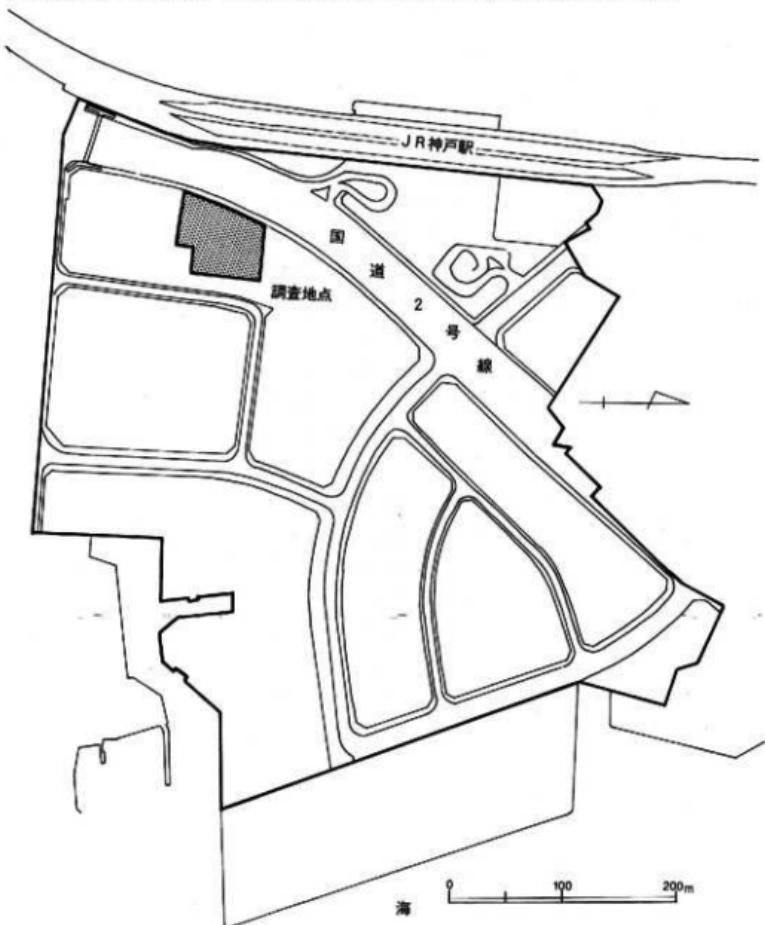


図5 神戸ハーバーランド計画区域と調査地点

II 位置と環境

神戸ハーバーランド遺跡は、神戸市中央区東川崎町1丁目に位置する遺跡である。当遺跡周辺は旧国鉄湊川貨物駅敷地であった。1870(明治3)年鉄道敷設の計画があり、当遺跡周辺に神戸駅が設けられることになり、早くから官有地となっていた。そのため、無番地という登録をされており、小字は存在しない。東川崎町1丁目となったのも新番変更の時である。そのため、字名がないことから新しい住所となる事業名を遺跡名とすることにした。ただ、調査地南側は弁天社があり、弁天と俗称されていた。調査地周辺は江戸時代末には『三軒屋』と言われ「楠公墓所の村」として知られ、遊廓があった海辺の村であった。

兵庫区・中央区など市街地の調査が行われるようになったのは、神戸市教育委員会によって昭和53年神戸市営地下鉄建設に伴う調査以降頻繁に行われるようになった。それまでは、山麓部の東山遺跡・河原遺跡などが知られていただけで、市街地での遺跡の存在は知られていなかった。現市街地の下に多くの遺跡が眠っており、予想以上に保存されていることが判りつつある。神戸ハーバーランド遺跡もその一つと言える。

兵庫区・中央区での最古の遺跡は、旧石器時代で会下山遺跡からナイフ形石器が出土している。縄文時代になると、僅かに遺跡数は増加するが少數である。宇治川南遺跡・楠・荒田町遺跡、五番町遺跡(長田区)で早期から晩期の土器が出土している。弥生時代になると遺跡数は増加し、古くから知られている山麓部の遺跡と最近知られるようになった市街地の遺跡がある。周辺の遺跡としては最初に紹介された河原遺跡は、弥生中期の壺の中にゴホウラ貝の腕輪が30数個入っていたことで知られている。熊野遺跡は、最初の遣査検出遺跡である。他に山麓部・丘陵部では東山遺跡・会下山遺跡・布引丸山遺跡や高地性集落である天王谷遺跡・祇園神社裏山遺跡が存在する。市街地では、前期から後期までの歴代遺跡である楠・荒田町遺跡をはじめ、中山手遺跡・三宮駅構内遺跡などがあり、今後遺跡の増加は間違いないものと思われる。古墳時代になると前期古墳が丘陵上に築造される。会下山二本松古墳・夢野丸山古墳がそれで会下山二本松古墳は竪穴式石室を内部主体とし、鏡・琴柱形石製品・刀などが出土している。昭和59年度の調査で全長55m前後の前方後円墳であることが判明した。後期の古墳は知られていないが、荒田神社周辺や湊川神社周辺に塚のあった記録が残されており、今後新たに確認されるかもしれない。奈良時代になると会下山北西の山麓部に房王寺廃寺が建立され、瓦が出土している。平安時代に入ると平清盛が造営した福原京が神戸ハーバーランド遺跡北側に造営され、「雪の御所跡」「平頼盛山荘跡」など推定されているが、明らかな遺構は検出されていない。最近、神戸大学附属病院の構内で関連遺構が確認され、福原京の一部が判りつつある。

福原京に関連する「兵庫の津」も神戸ハーバーランド遺跡西方に存在したはずであるが、位置は明らかでなく、関連づける遺構の検出も行われていない。



図 6 神戸ハーバーランド遺跡の位置と周辺の遺跡

III 調査結果

今回の調査は、南北にトレンチを2本入れて行った。トレンチは海岸線に対して直交するよう設け、北をAトレンチ・南をBトレンチとした。両トレンチとも、表土下1m前後までは国鉄の盛土や建物基礎、廃棄土坑等が入っている他、直下には耕作面との間に黄色粗砂が厚く堆積していた。建物基礎については、煉瓦作り建物があったようで基礎は2m以上下に入っていた。調査は黄色粗砂まで、表土下1.2~1.3mまでを重機を用いて排土を行った。

1. Aトレンチ

調査区北側のトレンチで、最初の耕作面は表土下1.2m（標高0.8m）前後で検出した。⁽¹⁾ 調査区の中央やや東寄りで黄色粗砂の中にやはり細かい黄色砂が幅6mに渡って耕作面下より山形に飛び出しているところが見られた。黄色砂が埋没するまでは地表に晒されていたようで、黄色粗砂との境は暗色

ぎみであった。この

突出は、北東から南

西方向にトレンチを

横断し、海岸線に平

行して走っていた。

小さな砂堆の一部分

と思われる。砂堆の

上面は擾乱のため不

明だが、残存の最大

高は1.0mであった。

耕作面はこの砂堆

の両側で検出したが、

海側は標高0.5mか

ら耕作面を検出し、

山側に比べ0.3m低

い場所で耕作を行っ

ていた。どちらも敵

は検出されなかった。

海側の耕作面の砂堆

際、これに沿って、

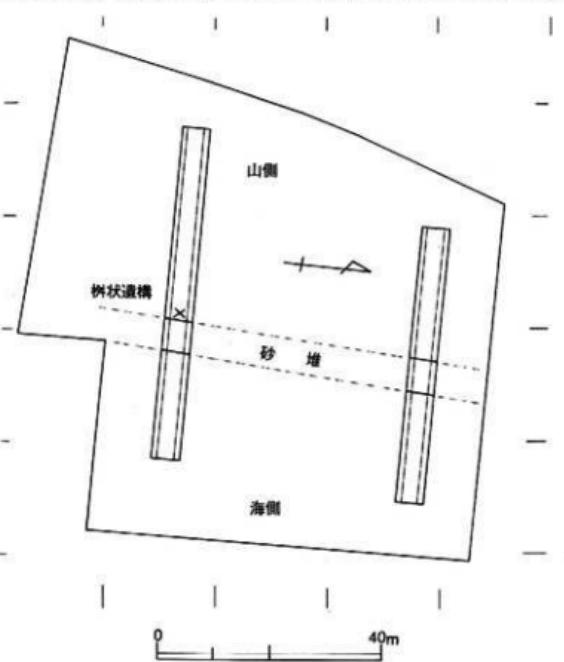


図7 調査地トレンチ配置図

幅20cm、深さ10cm程の溝と、この耕作面側に高さ10cm、幅30cm程の隆起が見られた。耕作面に伴う畦畔と水路と思われる。耕土の厚さは10~15cm程である。下にはもう一面耕作面があり、山側では10~15cmと厚く、土も暗灰色砂質上で上塗化している。これに比べ海側は堆積も薄く、土壤化が進んでいない。海側の耕作面はレベルも海面に近く稲作には適していなかったと思われる。耕作面の下層は、山側では黄色砂が厚く堆積していた。

海側では、この下には海を埋め立てた土砂と思われる暗灰青色の砂混じり粘質土（汚れた土で木片・炭混じり）が、50~60cmに渡って堆積し、下層は山側と同様に砂の厚い堆積であった。海が埋められ下層の耕作面が開拓される直前までは、海岸線がここまで入り込んで、砂堆がこれに沿って走っていたと考えられる。また、山側の耕作面は砂堆を削して徐々に面を広げている。しかし、この砂堆が完全に崩されずに残ったのは耕作面を海風から守るためであろう。

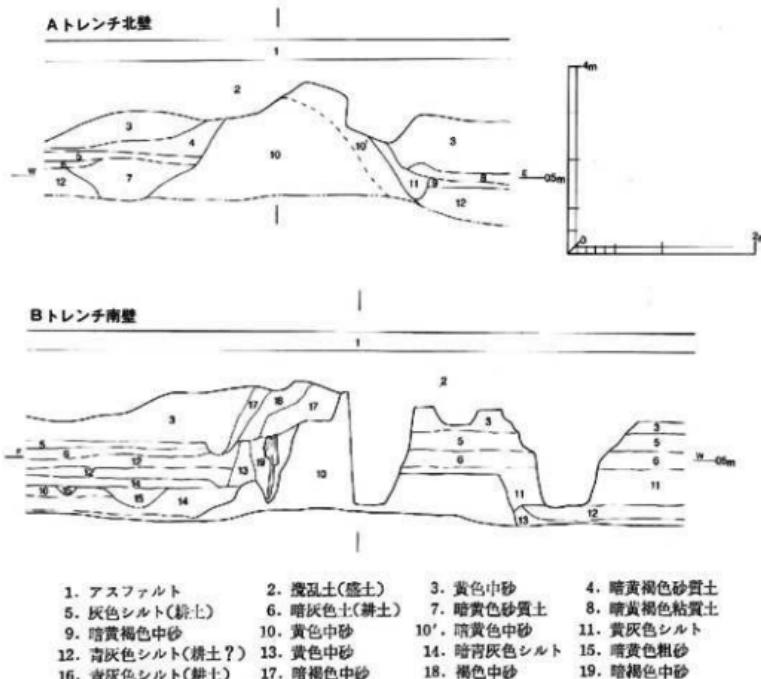


図8 土層断面図

遺物は、旧国鉄の土坑内と水田面内より出土した。水田面内のものは江戸時代後期～明治時代初期、土坑内のものは大正～昭和初期と考えられる。特にトレンチ西端から検出された土坑は重機掘削でプランなどは不明だが、駅売りの茶瓶・牛乳瓶などを検出し、大正～昭和初め頃の神戸駅の様子を伺い知ることが出来た。

2. □トレンチ

調査区南側のトレンチで、表土下は、Aトレンチとほぼ同じ状況である。表土下1.0m（標高0.9m）から最初の耕作面を検出（山側）した。しかし、Aトレンチ同様畝は検出されなかった。

この調査区でも、中央やや東寄りで幅6cm程の砂堆を検出した。やはり、北東から南西方向にトレンチを横断している。Aトレンチの方向と一致するため同じ砂堆の続きと思われる。上面はこちらも擾乱の為に確認出来なかつた。

耕作面は砂堆の両側でやはり検出した。海側は標高0.7mでAトレンチ同様低いレベルで耕作を行っていた。砂堆の海側には、杭を打って土留めを行い耕作面に砂が流入しないよう防いでいた。ここでも幅30cm、深さ20cm程の溝が砂堆際と上層の耕作面とを画していた。

海側では、耕作面が3～4面が確認できた。海水や洪水砂の影響でかなり不安定であったため埋め立てを繰り返したことがわかった。耕土の厚さは各面10cm～15cmである。この最下面で、海拔0m近くとなる。下層はやはり埋め立て土の汚れた暗灰青色粘質土（20～30cm）で地上げされている。山側の耕作面は3面が検出され、こちらでは砂堆を大きく削り耕作が行われている。

山側の砂堆際には、5.8×2.5mの枠状遺構が出土した。大きいもので、4m大の船材などを転用して枠囲いをし、内側辺に沿って板と板の間に、オールなどをやはり転用した杭を打ち、枠材を支えていた。枠組みは部材と部材を組んだりせず、適当に枠材を配して支えに杭を打っただけのものである。遺構の板の上面が海拔0mとなり、使用当時に水に浸かった状態であったと思われる。北側は図でも判るように閉ざされておらず枠材が斜めにずれていた。また他の3辺は枠材が2枚ないし3枚重ねて使われているが、北側はこのずれた1枚のみである。

枠状遺構の方向は東西方向を長軸に持ち砂堆際にあるが、砂堆との方向は全く異なる。耕作面との切り合いは建物基礎の擾乱で確認できなかつたが、砂堆を少し切り込む位置にあることから、山側の2番目の耕作面と同時期の可能性がある。

遺物は、染付磁器、青磁、陶器（鉢・甕）、砥石など江戸時代末の遺物が耕作土内から出土した。この他、ベニを入れたグイ呑み（明治）・瓦片（中世？）の各1点が黄色粗砂から出土した。

(1) 砂堆や耕作面に関することは高橋 学氏より教示を受け、上層観察などは調査者が行った。

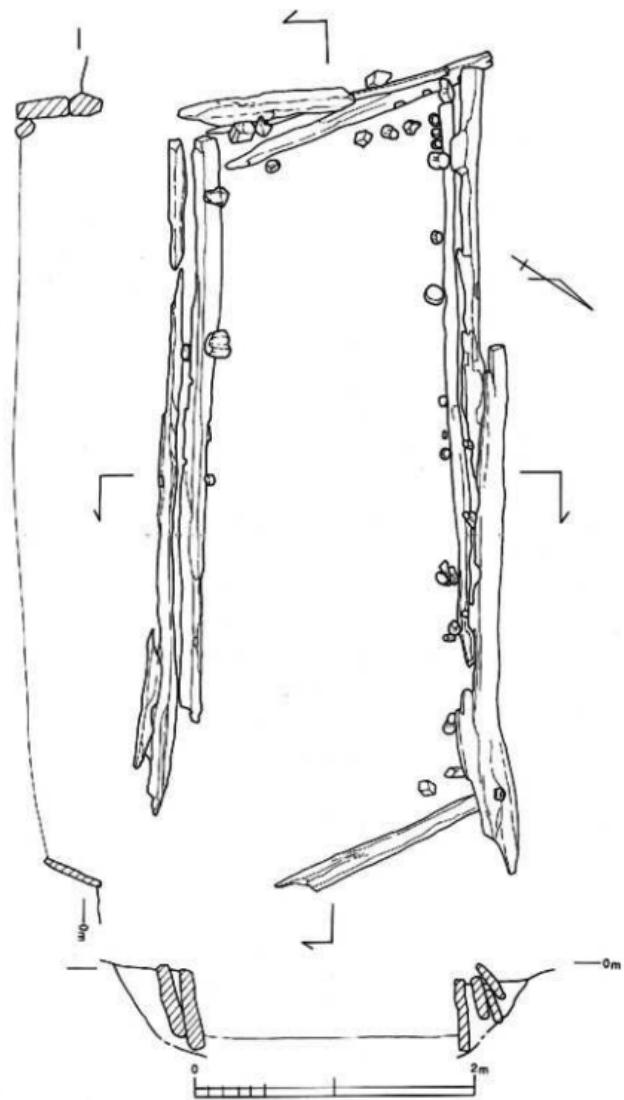


図9 樹状造橋実測図

IV 出土遺物

1. 船材・その他の木製品

Bトレーナーからはすでに報告のように、析状遺構を検査したが、ここではこの遺構の部材について述べてみたい。遺構内の板縫いに用いられていた木材の内、残りのよいものを選び図示した。図の番号は遺物番号に対応する。

1は(ツガ材)、長さ348cm×最大幅40cm×最大厚12cm(法量はすべて残存長)である。傷みが激しく、先端から100cmまでは原形に近い幅を残すが、後部はほとんど朽ちてなくなっている。先端から100cmまでは幅15cm、深さ5cm程の溝状に穿たれた枘が残る。更にこの枘穴の中に釘穴が穿たれ、枘穴で噛み合わせた板を固定するための側面には断面の半たい釘が30cm間隔で3本残っていた。他の部材を接合するためのものと思われる。一見この部材は、和船の航とも思われるが、和船の航は側面に根櫓(加敷)を固定する構造で、この部材のような接合はないそうである。(図12参照)

2は(ツガ材)長さ416cm×最大幅66cm×最大厚11cmである。部材は側辺がやや傷んでおり面が原形のまま残っているところは少ない。特に、地表に晒された側辺は風化が激しい。両端には幅15cm深さ1.0cm程の凹みがみられる。100cm間隔で8cm×4cmの梁状のものを固定する枘が穿たれ、3箇所に枘材が残っていた。船の部材であれば梁と思われる。この他、板の小口に横方向の枘穴と、図示した面には4~5cm×2~3cm程の枘穴が数箇所あけてある。この部材も、大きさに比べて梁と思われる部分が小さく船を支える強度がないことや、和船では貫通するはずの梁材が裏に貫通していないことなど、船材とするには疑問が残る。

3は(ツガ材)2と同じ部材であるがかなり構造が異なる。(長さ403cm×最大幅67cm×最大厚12cm)幅はほぼ残るが長さはさらに長い可能性が十分ある。

やはり、地表に晒されていた方は傷みが激しい。図のように釘穴が辺に沿って、部材の両端に開けられている。図の上側の釘穴は朽ちて広がり大きさは判りにくいが、下のものは良く残っている。ほぼ10cm×3cmの横長で深さ2~3cm前後の穴を繋いで掘り、この中に釘を通す穴(3cm×1.5cm)を斜めに開け、材の側面に抜いている。上側の釘穴も同じ構造と思われる。釘穴には木製の栓(もしくは木釘)が嵌め込んでいたが、これでは(材質はモミ)、部材を他の部材と固定することは困難である。実際に和船では釘を打って船を造ったが、この部材は解体後何らかの理由で穴を詰めたと考えられる。しかし、板を密閉しても枠縫い自体に気密性がある構造とは考えられない。この遺構のために栓をしたのではなく、転用を何度も繰り返す内に行われたものであろう。一般に和船の部材の接合は釘によって行われ、漏水を防ぐ必要から独特の工夫がなされる。釘の頭にマキハダを巻きつけこれを釘穴に打ち込むのであるが、この

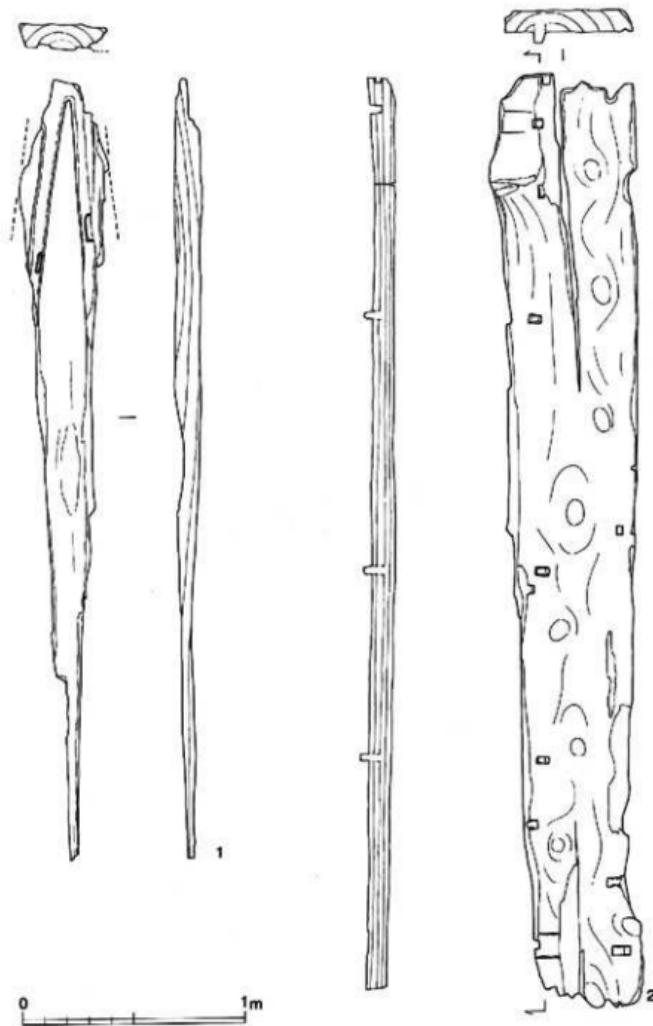


図 10 船 材 実 測 図 (1)

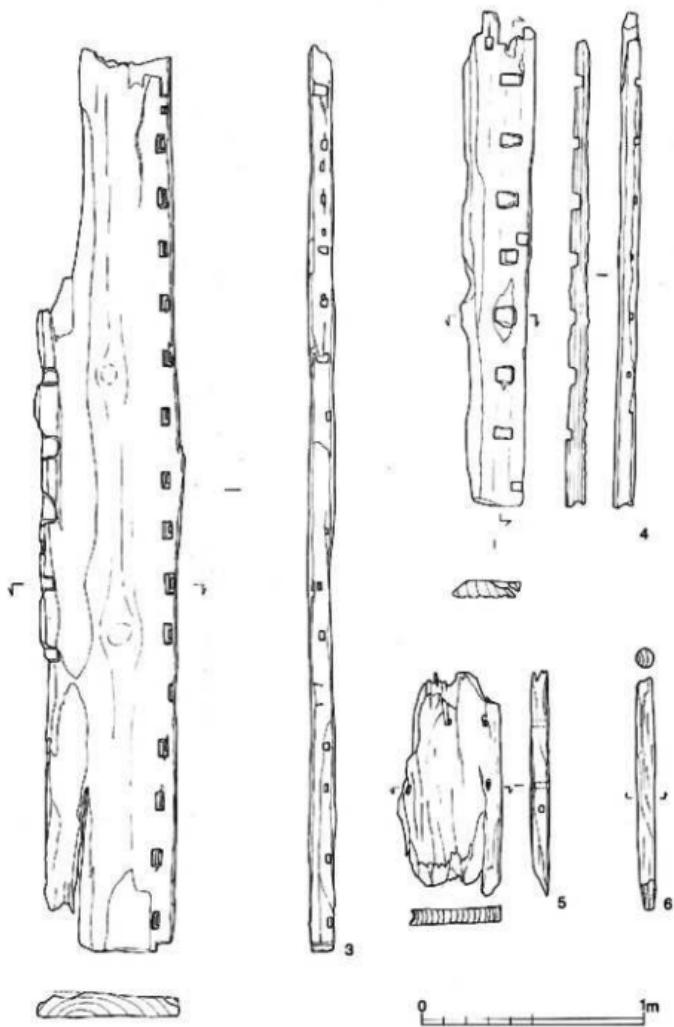


図 11 船材(2)・その他の木製品実測図

ときの釘と釘穴の間隔が問題で、釘穴は釘よりやや狭く穿たれる。こうすると、海水のために船材と釘が膨張して穴が寒がり、釘の頭部分もマキハダによって密閉されるのである。⁽³⁾

図の左端に小さな切り込みや、右端に角釘を打ち込んでいるが、このような切り込みや角釘の打ち方では、漏水のおそれがあり、船組みの為の造作ではないと思われる。

4は(ツガ材)、長さ219cm×最大幅32cm×最大厚9cm。図の上部分と両端が失われている。部材の残存部中央よりやや下方に1列に釘穴が穿たれている。縦11cm×横5.5cm、深さ4~5cm程の穴を開けた中に、やはり2~3cm角のやや横長の小さい穴を側面に向け貫通する。間隔は3よりも広く、釘穴の頭部分の穴も大きく取ってある。図の右端の切り込みや、その他の枘穴については船組みに使用される可能性は少ない。

5(二葉マツ)、残存部は長さ81cm×最大幅38.1cm最大厚6.8cm、部材の断片である。図示した平面の3箇所に枘穴がある。平面のものは真っ直ぐ裏側に貫通しているが、側面のものは数cm程で中に入り止まっている。

6は(ツガ材)オールの手元側の断片である。(長さ84.1cm×最大幅6.4cm残存)遺構の枠組いを支える為に、この長さに切られ打ちこまれていた。オールの末端は削りを入れて、手に刷染むようにしてある。断面は円ではなく、やや楕円形に成形されている。

以上本製品について見てきたが、これらは船材であるものと(3・4)、その可能性の非常に強いもの(1・2・5)、オールの断片(6)である。3は材の大きさや釘穴の入れ方等から舟財船クラスの船の中棚の部材と思われる。4は3より小振りで材も薄い。釘穴の付き方などから船の上棚の一部と思われる。1・

2・5については転用を繰り返すうちに枘や釘穴が増え本来の部材の用途が判らなくなってしまったものである。

6はオールであるが、オールは確実なところでは明治以降西洋から入ったとされ、江戸時代末はこれより早い例となる。山陰地方では江戸時代オールを使用する船が存在したそうであるが、瀬戸内では例を見たことがないという。

今回ハーバーランドから出土した船材は廃船となって解体された材が転用され、最終的に舟状造様に使われ埋め立てにより遺棄されたものであった。このように、特に大きな部材の多い船は廃船となって

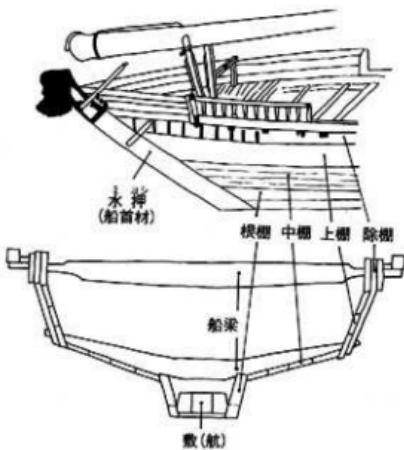


図12 船の名称

も、そのまま捨てられることは少なかったようで、解体され、風呂屋の炊き物・家屋の用材・埋め立て地の土留め等に使われた。長崎の山島の埋め立て地の根太となった例もある。この他、家や屋等に高瀬船クラスのものを嵌り込めるなども行われたそうである。

- (1) 材質鑑定については京都大学木材研究所 島地 謙名教授にお願いした。
- (2) 船材に関するこの文章は、神戸商船大学教授 松木 哲氏・北野新平氏の教示によるところが大きい、特に断らないかぎり両氏のご指摘によったものである。
- (3) 高砂の船大工であった船津重次氏の教示によった。
- (4) 『博多港』 福岡市教育委員会 1987年刊 によれば埋め立ての土留め材として和船の上部・根柢や垣立などを使った出土例がある。
- (5) 松木 哲氏の表示による。

2. 陶磁器など

今回の調査では、江戸末～明治初頭の黄色粗砂の盛土・江戸末の耕作土面・埋め立て土・耕状遺構などから少量ではあるが、陶磁器・瓦・砾石が出土している。

江戸時代の耕作面からはAトレンチで縁釉陶器皿、Bトレンチで染付磁器・陶器擂鉢などが出土した。縁釉陶器皿1は内面底部を幅広く輪状に搔き取るもので、17世紀後半～18世紀前半頃のものである。上層の耕作面の耕土内から出土した。Bトレンチのものは、4は擂鉢で11本単位の跡目を入れ、口縁外側には2本の凹線を持つ。6は白山4丁目遺跡などでも出土している小鉢である。⁽¹⁾ 10・11も染付け磁器の碗で11は姫路城跡に類似品の出土例がある。⁽²⁾ 7も磁器碗であるが完全に磁器化しないものである。6・7・10は上層耕作土内、11は山側の下層耕土内より出土した。これらの遺物は江戸時代後半のものである。耕状遺構からは染付磁器の12・8・瓦の各1点が出土した。12は植物文様のもので遺構の掘り方から検出した。8は内面無釉で徳利等の細片と思われる。他に瓦1点がある。焼成から江戸時代以前の物で土砂の中に混じったと思われる。

江戸末～明治初頭の黄色粗砂のものは2・3・5・9・13・14で2・3・13は染付磁器で、2・13は皿、3は小鉢になる。2は磁胎もガラス化し明治に入るものである。5は施釉陶器で口縁帯に印刻、外側に陰刻を施してある。9はゲイ呑みで中に紅を入れていた。時期は11・13が江戸時代後半で2・9が明治初め頃のものと思われる。

- (1) 陶磁器の一般的な知識については、岡田章一氏の教示によるところが大きい。
- (2) 『国内出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館 昭和59年刊
- (3) 『白山西4丁目遺跡』 白山西4丁目遺跡調査会 昭和57年刊
- (4) 『特別史跡姫路城跡』 兵庫県立歴史博物館 昭和60年刊

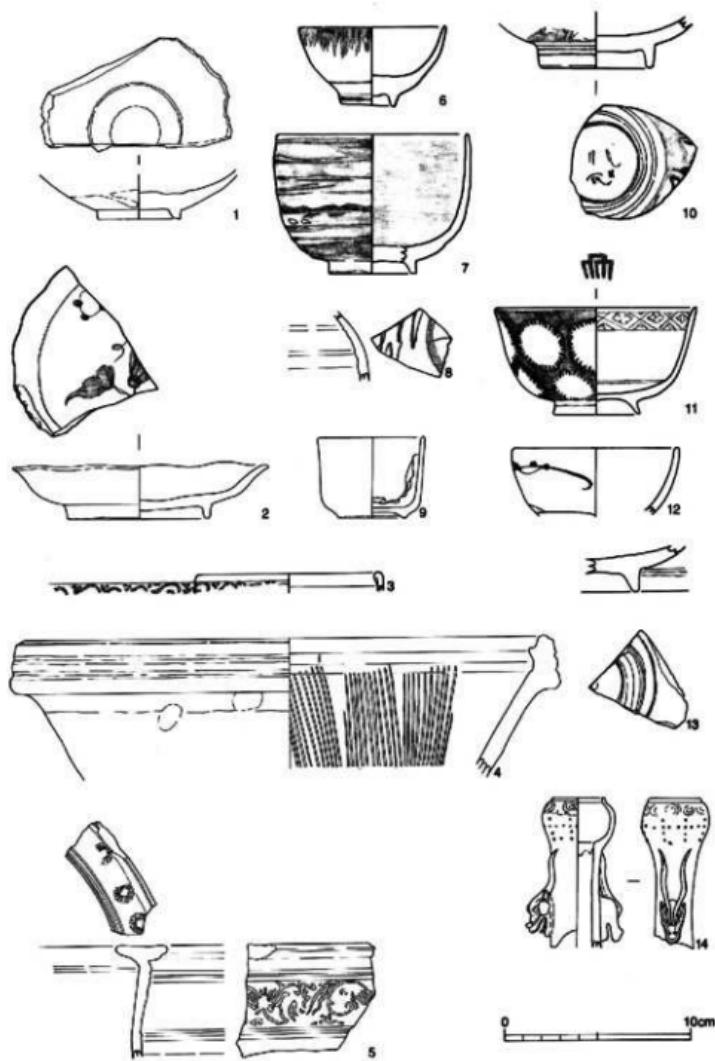


図13 南磁器実測図

3. 砧石・瓦

枠状遺構に掘り方から瓦の小片が1点出土している。平瓦の磨滅をうけたもので、凸面はヘラによって調整している。凹面は瓦の主軸に対して斜交する方向に整形原体の痕跡が平行に残っている。布目痕は見られず、粗いカキメ状の痕跡だけである。ナデによる調整を加えているが、逆に凹面を乱しているように見える。円孔などが欠失部分にあったのであろうか。厚さは2.0~2.4cmで残存長6.5cmを測る。長石をはじめとする小石粒を多く含み、東播磨地域の胎土と思われる。

砧石も1点出土している。Bトレント水田耕土からの出土で埋没時期は近世木である。残存長15.4cmを測り、端部を欠いている。基部は幅9.9cmで旧態を残している。自然面も一部あるが鐵方向の整形を加えている。底面も整形を加えて平滑にしているが磨面ではない。使用面は3面である。上面・右側面は全体を使っているが、左側面は全体の3分の2を利用している。石材は良質のものとは言えず、石の目が見られる片岩系に近い石材である。特に使われていない底面部分は硬質で片岩を思わせるものである。



図 14 瓦 拓 影

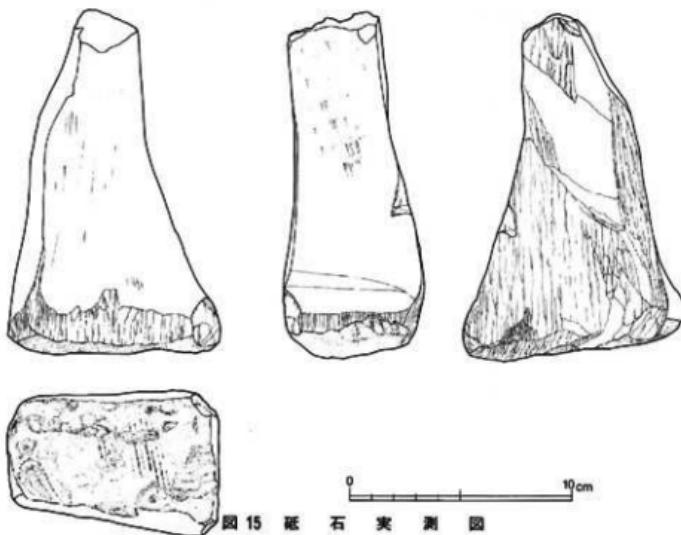


図 15 砧 石 実 測 図

4. 駅弁関係資料

(1) ガラス瓶

Aトレンチは旧国鉄関係の擾乱が激しかったが、この関係の土坑より駅売りの瓶類が出土している。これらは、牛乳瓶（1～19）とお茶容器（20～22）、薬瓶（23・24）などで、気泡を含み歪みのある瓶が多い。牛乳瓶は器面に鋳型の接合痕を残す。

お茶容器は細い口縁を持ち肩部が丸く球状になるものである。24がこの蓋になる。薬瓶は溶液の変質を防ぐ為に、それぞれ濃い青と茶色を呈する。容量は表に示した通りである。

牛乳瓶は個体数が多く、販売店名も判ることから、次の3種に分けて考察を加えてみたい。

A類—（1～10）王冠で栓をするもの。口縁が肥厚してから、瓶の下部が丸くふくらみ、下に移行するもの。丸いふくらみと頸部の間には小さい突帯が見られる。ガラスは、比較的気泡が少ないので、容量は1合3勺入り、明記しないものの2種がある。表1の通り1合3勺入りのものは260～280ml入るが、明記しないものは210～230mlと少ない。

B類—（11～18）王冠で栓をするもの。口縁は肥厚するが、瓶の下部が丸く膨らまないもの。A類に比べると、小振りで且つ気泡が多い。この瓶は一合入りであるが、容量は表5のように一口一杯まで満たして1合となるもので表記と異なるようである。

C類—（22）陶器口金式の瓶。瓶の口の4～5cm程下には、口を押された金具を止めるための穴がある。底部があげ底になり、背の高い物である。容量も他のものに比べ405ccと多い。

A類は、型（陽刻）で表側に『均質牛乳』（右書き）、登録商法、T & Co、の文字マークが見られる。この他、1に付いては、裏に『一合三勺入』、2には表側に『鐵道専用』（右書き）の文字がある。1～9總ての底部には『④』のマークが見られる。10については、ラベルを貼ったものと思われる。

B類も型で文字が刻まれている。11・12・13は（表）『京都渡月軒』、（裏）『金拾武鏡』（11）・『金拾參鏡』（12・13）の文字が見られ同じ品物が値上がりしている。14は（表）『全乳西洋軒』（裏）『内容量一合』、15は『一合入 全乳』（裏）『一合入』、16は（表）『名古屋駅大久保養牛舎』（裏）『全乳 正一合入』17は（表）『高木牧場』（裏）『一合入 福井軒』、18は（表）『浜松軒』（裏）『一合入』と無記名の無いがあり、この部分にラベルを貼った物と思われる。C類については文字を型で書いた物は見られない。

今回出土した牛乳瓶は中尾作成氏の教示によれば、器壁の薄いこと、歪みの激しいこと、気泡の多いこと、発色が緑色の質の悪いガラスを使っていることなどから特に駅売り専用に作られたものであるという指摘をうけた。当時も市販された牛乳瓶は回収され、洗浄した後、再利用されたが、器壁の薄い難な作りのこの瓶では再利用には耐えられないだろうとのことであった。出土品も土坑内から殆どが完形で出土しており、飲用後すぐ捨てたことが窺える。

牛乳が一般に飲まれるようになるのは、明治に入ってからの事で、明治3年に牛馬社が東京

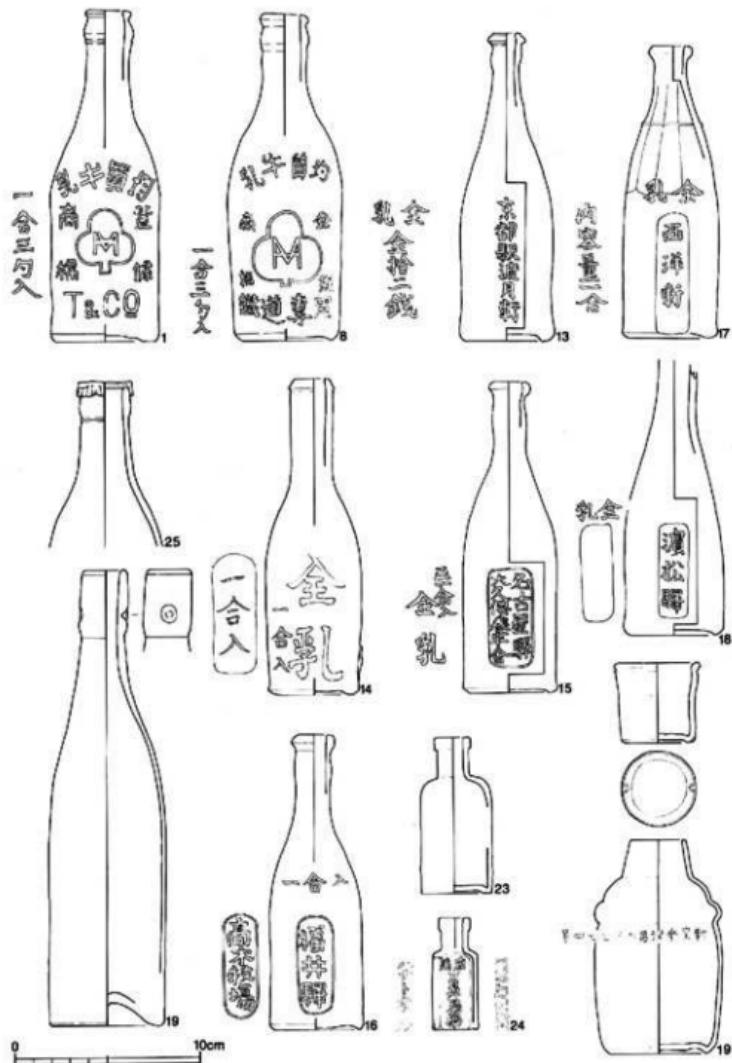


図 16 ガラス瓶実測図

築地で売り始め、明治7年には東京に数十箇所の牛乳屋が開業していたという。しかし、明治時代の牛乳は「熱病癪症等、其他すべて身体虚弱なるものには、欠くべからざる妙品」・「乳母いらず」と言われたように、老人・子供病人等の薬用として飲用されていた。普及層も限られた上流の人だけで、外交員が得意先を回って計り売りをしていた。この時の牛乳の容器は図17の1に見られるような金属製の容器にいれたり、牛乳専用の二重構造になった箱を荷車に積んで外交員が運び各家庭で計り売りをしており、定まっていなかった。⁽⁷⁾

牛乳の容器にガラス瓶が登場するのは、明治中頃～大正初めにかけてのことと、計り売り販売ではなく、少量ずつ容器に入れて売る様になり、牛乳瓶が登場する。⁽⁸⁾

最初の牛乳瓶は、瓶口にコルク栓や薄紙を丸めたものを詰めたり（図17の2）、陶器式口金の栓を針金で固定したもの（図17の3）などを使っていた。19はこのタイプの瓶である。口縁下の2つの窪みは栓を固定する針金の支点である。陶器式口金の瓶は当時の酒瓶をまねたものであるらしい。⁽⁹⁾

明治の中頃～大正初め頃には瓶口に薄紙をのせ、金属製のキャップで蓋をしたものが登場する（図17の4）。これは、現在の広い口の瓶に似たものである。

今回出土した1～18までの瓶は、大正の中頃に登場してから大戦頃まで使用された王冠をするタイプのものである。王冠キャップの瓶は2と違い口縁直下が筒状にならず、口縁部を肥厚させ、王冠の受けを持たせている。

大戦後は、図17の5のタイプの広い口の瓶に紙キャップをしたものが登場する。牛乳は戦前の薬用・強壮剤と言う意識から飲料品と言う意識に変わり需要が徐々に増大した。これに伴って瓶の洗浄も大きな工場で大型の機械を使って、大量に行うようになり、文字を陽刻した瓶は互いに擦れて文字が消えたり、瓶の割れる原因になるため使われなくなる。また、牛乳を販売する業者の大型化が進み、大部分の業者は1日100～数百本程の販売能力であったが、淘汰され生産は大手の業者が賄うようになる。⁽¹⁰⁾広口瓶は機械で牛乳を瓶詰めするのに便利だった。

昭和30年代に入ると紙にビニールを貼ったパック形式のテトラパック⁽¹¹⁾が登場する。当初は一部の学校給食等に使われていただけだが、昭和40年代に入ると割れないことや軽さ等から段々と普及し始める。更に1ℓ入りの容器なども登場して紙パックは瓶を凌いで利用されるようになる。現在では紙パックが全需要の70%を占めているようである。

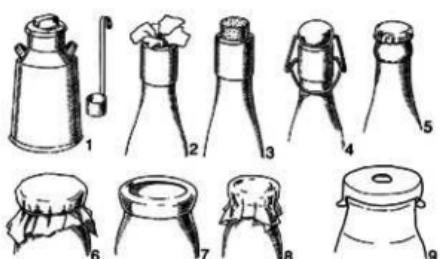


図17 ピンロの変遷

表1 ガラスピングの一欄表

番	分類	法量			容 量 表 示	色 調	接合痕	気泡
		口径	底径	器高				
1	A	2.5cm	5.9cm	17.8cm	249cc	1.3合	淡青緑色透明	○ ほとんど無し
2	A	2.5	5.9	17.7	243	1.3合	深青緑色透明	○ ほとんど無し
3	A	2.6	5.7	16.9	199	無	淡緑色透明	○ あり
4	A	—	5.9	—	259	無	淡緑色透明	○ あり
5	A	2.5	5.9	17.9	254	無	淡緑色透明	○ あり
6	A	2.5	5.9	17.9	253	1.3合	淡緑色透明	○ あり
7	A	2.5	5.9	17.9	244	無	淡緑色透明	○ あり
8	A	2.6	5.7	17.6	244	1.3合	深緑色透明	○ あり
9	A	2.6	5.7	17.0	210	無	淡青緑色透明	○ あり
10	A	2.5	5.7	18.0	210	不明	深緑色透明	○ あり
11	B	2.1	5.1	16.2	180	無	淡青緑色透明	○ あり(多)
12	B	2.0	5.0	16.1	182	無	淡青緑色透明	○ あり(多)
13	B	2.5	5.1	16.5	180	無	〃	○ あり
14	B	2.3	4.9	17.0	183	1合入	〃	○ あり(多)
15	B	2.2	5.1	16.7	183	正一合	深緑色透明	○ あり
16	B	2.2	5.1	15.9	171	1合入	透 明	○ あり
17	B	2.4	5.1	15.7	—	1 合	淡緑色透明	○ あり
18	B	2.5	5.4	24.4 (口火)	183	不明	透 明	○ あり
19	C	—	6.2	—	405	無	綠青色透明	× あり
20	茶容器	3.3	5.2	11.6	286	—	青緑色透明	○ あり
21	茶容器	3.0	5.2	11.5	270	—	淡緑色透明	○ あり
22	茶容器	3.1	5.2	11.9	269	—	深緑色透明	○ あり
23	薬ビン	1.8	3.8	8.4	51	—	深青色透明	× ほとんど無し
24	薬ビン	1.8	2.4	5.8	31	—	茶 色 透 明	× ほとんど無し

表2 牛乳価格(『値段の明治、大正、昭和の風俗史』週刊朝日編 昭和56年、1刊行)

時代	年号	価 格	時代	年号	価 格	時代	年号	価 格	時代	年号	価 格
明治	元年	5銭	明治	34年	4銭	大正	3年	5銭～8銭	昭和	7年	7銭
明治	8年	4銭	明治	42年	3銭・9銭	大正	10年	8銭～10銭	昭和	13年	8銭
明治	16年	3銭・5銭	大正	元年	4銭	昭和	元年	8銭			
明治	20年	3銭	大正	4年	6銭	昭和	5年	6銭			

しかし、昭和62年現在牛乳瓶は、見直されるようになってきた。500cc・900cc等の容器が作られ、レトロブームにのって売れているようである。⁽¹³⁾

これらのことから牛乳瓶の年代は19を除いて大正中頃～昭和初期と考えられる。値段が12・13銭であること（表1）駅売りで少し高いとみればうなづける。19も大正頃まで使われていたことは確実で土坑の上限をおさえる資料である。

- (1) A類は表記やマークがほぼ統一されており、同一の販売店で売られた可能性がある。
- (2) C類の栓の栓の方法については『森永乳業50年史』 森永乳業50年史編纂委員会 昭和40年刊による。
- (3) 均質牛乳は牛乳のクリーム分が浮び上がらないように均質化させたもので(Homogenization)、大戦後普及した。(『市乳工業』 沢郷友吉著 地球出版 昭和44年刊による。) 中尾作蔵氏によれば、今回出土のものは、本当に均質化したものでなく一般的な概念で質が均等で良質なぐらいの意味であろうとのことである。
- (4) この名は京都の駅弁屋の「はぎのや」の萩山敏治によれば、ホモ牛乳の略号とのことである。
- (5) 全乳、脱脂乳に対して全く脂肪を取り除かないもの (Wholemilk) をいうが、(注3)文献による。中尾氏の教示によれば、駿前、両取引上飲用牛乳全般の意味で使用されたらしい、駿前この言葉は同義の意味で市乳と言う言葉に置き換えられたということである。
- (6) これらの販売店については調査を試みたが、僅かに、渡月軒に付いて判ったのみであった、渡月軒は京都駅前の京都市左京区東洞院通七条下る2丁目塩小路町で牛乳など駅弁以外の駅先品を扱っていたが、昭和10年頃、鉄道弘済会（現KIOSK）京都事務所に吸収された。萩山敏治氏の教示による。
- (7) 『食生活世相史』 加藤秀俊著 柴田書店刊 1977年による。
- (8) 森永乳業阪神工場長 武藤潤隆氏より教示をえた。
- (9) 同 上
- (10) 中尾氏・武藤氏の教示による所が大きい。当時の販売店は一般的には自前の牧場を持ちその牛乳を詰めて販売していたが、小さな所でも瓶詰まで行い販売のみという店は無かったそうである。
- (11) 当時の牛乳の殺菌方法は瓶詰めのち高温（95度前後）の湯の中につける方法で温かいまま保温して販売していた。これでは衛生上不十分で、戦後は米軍の指示で瞬間高温殺菌法が採られた。瓶詰め前の牛乳を殺菌するもので、この方法では大型の設備が必要となり、小規模な業者は廃業するか、販売店となっていました。
- (12) (2)文献及び『チチャス百年の歩み』 株式会社チチャス乳業編集委員会編 昭和60年刊
- (13) 朝日新聞昭和62年9月3日朝刊

(2) 駅茶瓶・蓋・ゲイ呑みについて

茶瓶（1～12）1～8までは直立する口縁の内側にかえりを持つものである。注口は胴部中程から斜め上方に向かって取りつけ、把手受けを注口部上方と反対側につけている。

施釉してあるものと(7~16)、しない物(17・18)がある。施釉のものの底部はあげ底だが、しないものは平底に近い。また、側面に文字書きのあるものは施釉する物に限られている。文字はいずれも施釉部分に書かれ、駅名を記しているが16のように「お茶は静岡」等と所在地のセールスポイントを書いたものもある。柴根遺跡出土のものでは駅名と販売店名をしてした物が知られている。

口縁の内側にかえりを持たない13・14は、いずれも施釉されている。いずれも名古屋駅と思われる。

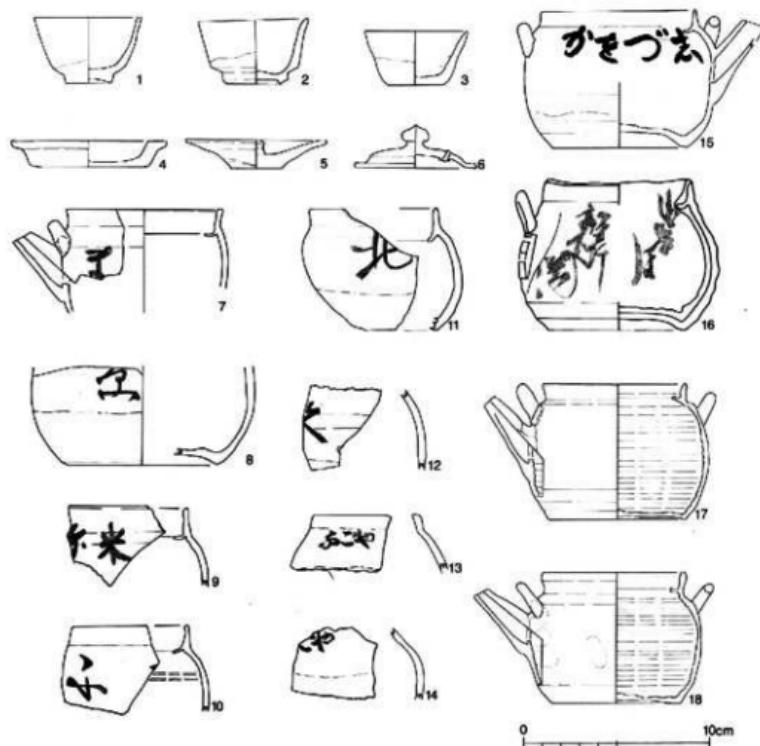


図 18 駅茶碗・蓋・グイ呑み実測図

蓋（4～6）は、圓化した3タイプがある。5は低部糸切り未調整で内側に凹みつまみの付くものである。4はやはり糸切り未調整で皿状の器形を呈し、透明な釉が施されている。3は現在よく見られる宝珠形のつまみの付くタイプである。

グイ呑みは2タイプある。糸切り未調整のもの（3）、底部を輪高台状に成形した（1・2）ものである。

これらのセット関係は、栄根遺跡によれば、かえりの付く茶瓶は蓋の1と、かえりの付かない物は蓋2とセットになるという。しかし、かえりの付くもので施釉のない物と、蓋6は胎土・焼成具合が近似しておりセット関係になると思われる。グイ呑みに付いてはセット関係は不明である。これらの時期は栄根遺跡の出土品に近似していること、戦後は販売されなかったことから大正～昭和初期頃のものと考えられる。⁽²⁾

大上武男氏の教示によれば、15は信楽のもので、4・13・14（名古屋）は瀬戸の光陽陶器で焼かれたものらしい。丹波でも大戦後、氏の働いてこられた鎮台窯で駅茶瓶を昭和40年前頃まで焼いてこられたそうである。多い時は1年に2万個程度生産していたそうで、京都の萩の屋・大阪の西洋軒・神戸駅の淡路屋等近辺の駅弁屋に販売するばかりでなく、瀬戸の業者などと協定を結んで遠隔地にも販路を広げていたそうである。しかし、駅茶瓶の販売は現金買いのため資金を先行投資せずに済むことが有利であったが、利が低いため余り魅力のある商売ではなかったようである。戦後の容器は丸いものでなく、四角い胴に隅を面取りしたもので、把手はなく、型で作られた。また後に丹波ではビニール製の容器を開発し売り出すようになる。

- (1) 『栄根遺跡』 川西市教育委員会 昭和57年刊
(2) 鎮台窯 大上武男氏・淡路屋 入江康之氏の教示による。

(3) この当時の駅弁について

品川～新橋間に鉄道が開通したのは、1872年（明治5年）のことであるが、当時はまだ乗車時間が短いため駅弁はなかった。⁽¹⁾駅弁の登場で、今のところ確実とされるものは、1885年（明治18年）私鉄日本鉄道宇都宮駅で宇都宮市伝馬町の旅館白木屋（現白木ホーテル）が「駅舎内改札口沿いの売店及び立売りを採業し食料品を販売した」のが初めてである。しかし、資料的には確実ではないが、同鉄道の熊谷駅の明治17年説等、幾つかこれに先んずる例も見られるようである。これらの説の中でも最も早い例が、『神戸駅史』の明治10年7月、「立売り弁当販売開始」という記述である。しかし、残念ながらこれを裏付ける資料は今のところこれ以外には見当たらない。なお、神戸駅では戦前には松尾政吉が弁当屋を行っていたが戦後になってこれを淡路屋が引き継いだ。⁽²⁾

この頃の駅弁は、白木屋の例で言えば「ゴマ塩をふりかけた梅干入り握り飯2個に沢庵をそ

え竹の川で包んだだけのもの」のよう、握り飯を竹の皮でくるんだものが主流であった。現在の普通弁当と呼ばれる、幕の内形式が登場するのは、1889年（明治22年）1月に山陽鉄道姫路駅でまねき食品のてがけたものが最初といわれる。これには白米のほか、卵焼き・蒲鉾・魚料理などが入っていた。しかし白米が常食ではない当時の庶民にはなかなか手の届くものではなかった。

これ以後、駅弁は鉄道の発達とともに各地で売られるようになる。列車の始発駅、乗り換え駅、連隊所在地の駅などが最もよく売れたようである。特に駅弁の普及に貢献したのは、軍隊の需要が大きかったようである。日露戦争後から昭和の初め頃は戦争が頻発し、部隊の増設もあったため、兵隊輸送や面会家族の食事等で業界は活況を呈した。県内でも福知山線の弁天駅（後篠山駅そして篠山口駅）では70連隊の開設（明治41年）とともに、三田市内の弁当屋が篠山に分家を作り店を開きをしたほどである。このように駅弁は当時から、小規模な店が駅毎に許可を得て販売を行った。これが、土地に結びついた名物駅弁を生んできたのである。

当時の駅弁は1930年（昭和5年）1月国鉄当局の主導で「上弁35銭を30銭、並弁は廃止、翌年2月にお茶は5銭」に値下げされ、以後第二次世界大戦まで価格はほぼ凍結されている。鉄道専用の牛乳が価格面で利益が上がらなかったと、中尾作蔵氏より伺った。いくら活況を呈していたとはいって、この当時は苦しい時代になっていたようである。

今回出土の急須・蓋・ダイ呑みのセット、牛乳瓶は大正中頃から昭和初期のもので軍隊関係などで活況を呈していた最後の時期のものである。これらは、この時期に各地で販売され、神戸駅構内または、神戸駅を終着駅にした列車内で捨てられた物と思われる。急須の文字を見てゆくと、静岡・名古屋・米原と東海道本線の駅が見られる。神戸駅は同線の終着駅で、おそらく神戸駅止めの列車の廃棄品であろう。しかし、牛乳瓶には、浜松・名古屋・京都のほか福井があり、北陸本線に乗り換えた乗客が捨てたものが混じっていたと思われ、当時の人々の動きが推測される。

(1) この文章は特に断らない限り『駅弁物語』 瓜生忠夫 昭和54年刊によった。

(2) 『神戸駅史』 国鉄神戸駅編・発行 昭和32年刊によった。

(3) 渋路屋 入江康行氏の教示による。

V おわりに

神戸ハーバーランド遺跡の調査は、8日間という非常に短い期間の確認調査であったが、予想以上の成果を挙げたものと思われる。神戸市教育委員会による調査や兵庫県教育委員会の立会調査などで、遺跡の存在はすでに確認されていた。それは、近世後半以降の畠作遺構であった。今回の調査では、畠・水田遺構の確認以外にも旧海岸線（砂堆）の位置を確定出来たことと、船材などを再利用した枠状遺構を検出出来たことの2点に意義が認められるものと思われる。

畠・水田遺構は5面以上確認している。調査地域が旧国鉄淡川貨物駅であり、明治7(1891)年に東海道本線が開通しており、それ以前に官有地になっていることから遺構の下限は押さえられる。上層の水田面の時期が下限の年代に近いもので、下層はそれより遡るわけであるが、上限を示す資料は得られていない。漠然と近世の範疇と捉えるのが妥当かと思われる。ただ、中世にまで遡らないという確実な根拠は持っていないが、農業史の観点から新田開発の時期を考慮すると近世の遺構と考えられよう。

昨年までの神戸市教育委員会の調査では畠作遺構が検出されていたが、今回の調査では畠・水田の両方を確認している。遺構の種別の相違は、砂堆の内外と言う位置的な差によるものである。砂堆内部は水田として、外部は畠として土地利用が行われている。海水（塩分）の影響によるものと考えられる。

調査地南側から和田岬にかけては、日宋貿易の中心となり、港町神戸の基礎となった「兵庫の津」の推定地である。今回の調査で砂堆を確認し、旧海岸線の一部を実証出来たことは意義があり、今後「兵庫の津」推定への一石になればと思われる。

枠状遺構の性格は、砂堆との関係は無視出来ないもので、有機的に強い関連のある性格であろう。污水溜や耕作に関連した灌漑施設、そして船入りなどの可能性が考えられる。遺構の上面が0mと標高の低い位置に築造されていることも、性格を考える上の補助になろう。木組みは納・溝などで水漏れを防ぐような組み合わせは行っておらず、水よりも土砂を防ぐ方に目的があったように思われる。幅が2.5mと船入りと考えるには幅が狭いことが指摘され、収納される船が小規模なものに限られてしまう。この程度の船は砂浜に引き上げているのが一般的であり、施設を築く例は城内の倉庫に伴う施設があるが、ほとんど例はない。調査地周辺は東海道線敷設されるまで福原の街であったことを考慮すると、廓に関連する遺構の可能性が残されている。枠状遺構を構成する部材の多くは船材である。廢船となつても材料は2次使用されることが遺有であるが、現在残されている和船は數少ない。檻板の部分で、船材として価値ある資料と言えよう。ただ、時期決定出来ないことが惜しまれる。遺構の時期より古いものとしか

判らないが、近世の所産と考えるのが妥当であろうか。

A トレンチ北側の廃棄土坑から駅弁関係の資料が出土している。兵庫県下でも栄根遺跡の調査で福知山線川西池田駅の、明石城跡の調査で山陽本線明石駅の関係の同種の資料が出土している。神戸ハーバーランド遺跡は神戸駅に伴うものである。神戸駅は東海道本線の終着駅で、山陽本線の始発駅として、昇降客も多く廃棄物も多かったことと思われる。今の段階で埋蔵文化財の対象として扱うことには疑問を感じ躊躇せざるを得なかったが実際に資料の類例調査を行ってみると、不明な点が多いことを痛感した。資料として保存されているものではなく、文化財としての早急な調査が望まれる。牛乳瓶についても同様で、幾つかの会社に教示を得たが、現物を保有しているところはなく、すでに文化財としての範疇に入るもので、十分価値ある資料と考えられる。当時、牛乳の駅売りは小規模な業者が大半で、第二次世界大戦後、合併する企業した業者が多く記録が残されていない。調査の必要性を感じた。

神戸駅は鉄道唱歌でも「歴史の聲も數多く　ここは名高き神戸駅」と唱われ、新しい神戸の中心地となるべく期待された地域であるが、最近の停滞ムードは否めない事実である。その状況を払拭するプロジェクトの一環として神戸ハーバーランド計画が実行されつつある。市街地の再開発で保存状態は良好とは言えないが、周辺地域の調査に「兵庫の津」の確認など期待したい。しかし、砂堆の確認など小面積の調査では判明しにくいのも事実であるが、ミクロな調査が望まれるものである。

前述したように埋蔵文化財の範囲を逸脱していないかの危惧も持ったが、整理調査を進めていくうちに新しい問題点が生まれ、また新しい事実もつかめてきた。埋蔵文化財行政上には難しい問題であるが、歴史の上では必要な調査である。新しい段階の取り扱いについて一つの枝路に立たされている気がし、問題を投げかけ示唆を与えてくれた調査と思われる。新しい分野ゆえに不明な点も多く、多数の方々に御教示・御指導を賜った。深く感謝するとともに、神戸ハーバーランド遺跡の資料が活用されることを願うものである。

図 版



——源上人遊行繪巻「兵庫の海」(真光寺蔵)から——



神戸ハーバーランド造跡周辺空中写真(国土地理院撮影)



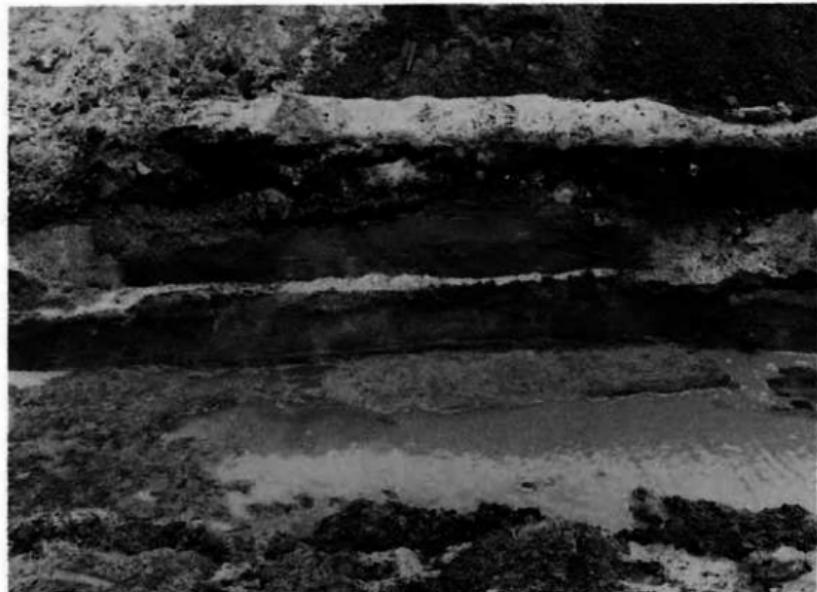
調査前風景



A トレンチ調査風景(東から)



B トレンチ調査風景(西から)



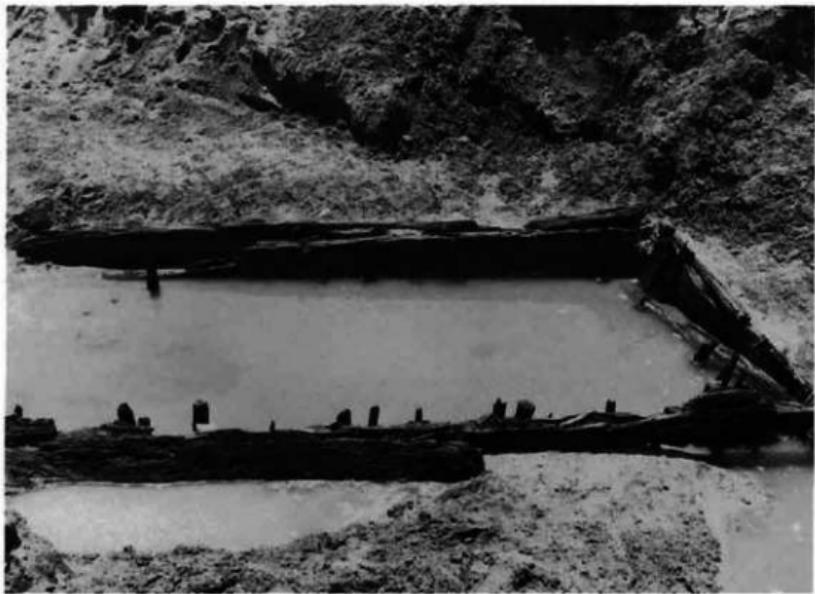
A トレンチ砂堆断面(南から)



B トレンチ砂堆と耕作面(北から)



樹状遺構(北から)



樹状遺構(西から)



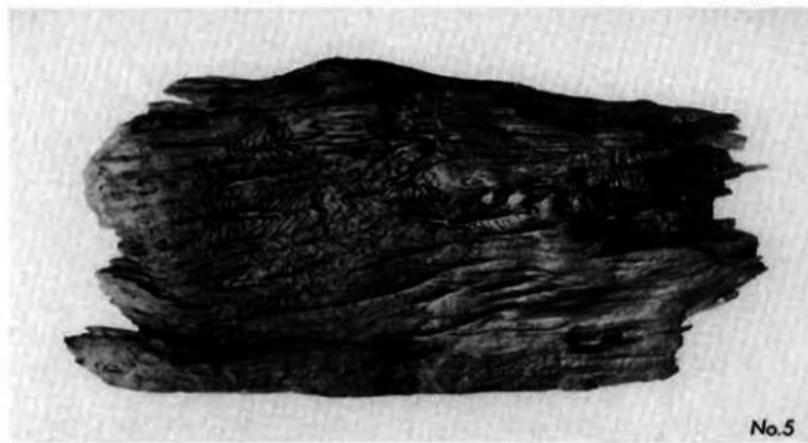
樹状造構内部(北から)



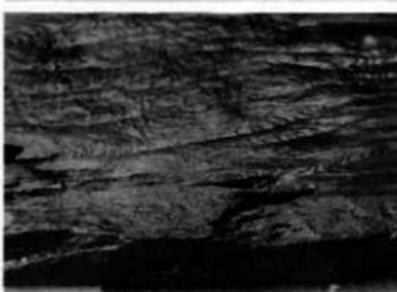
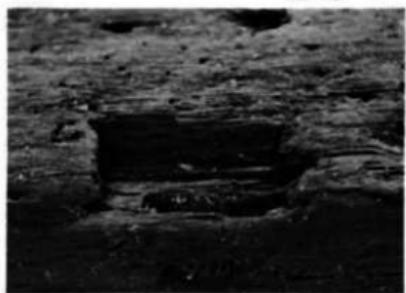
樹状造構(南東隅)



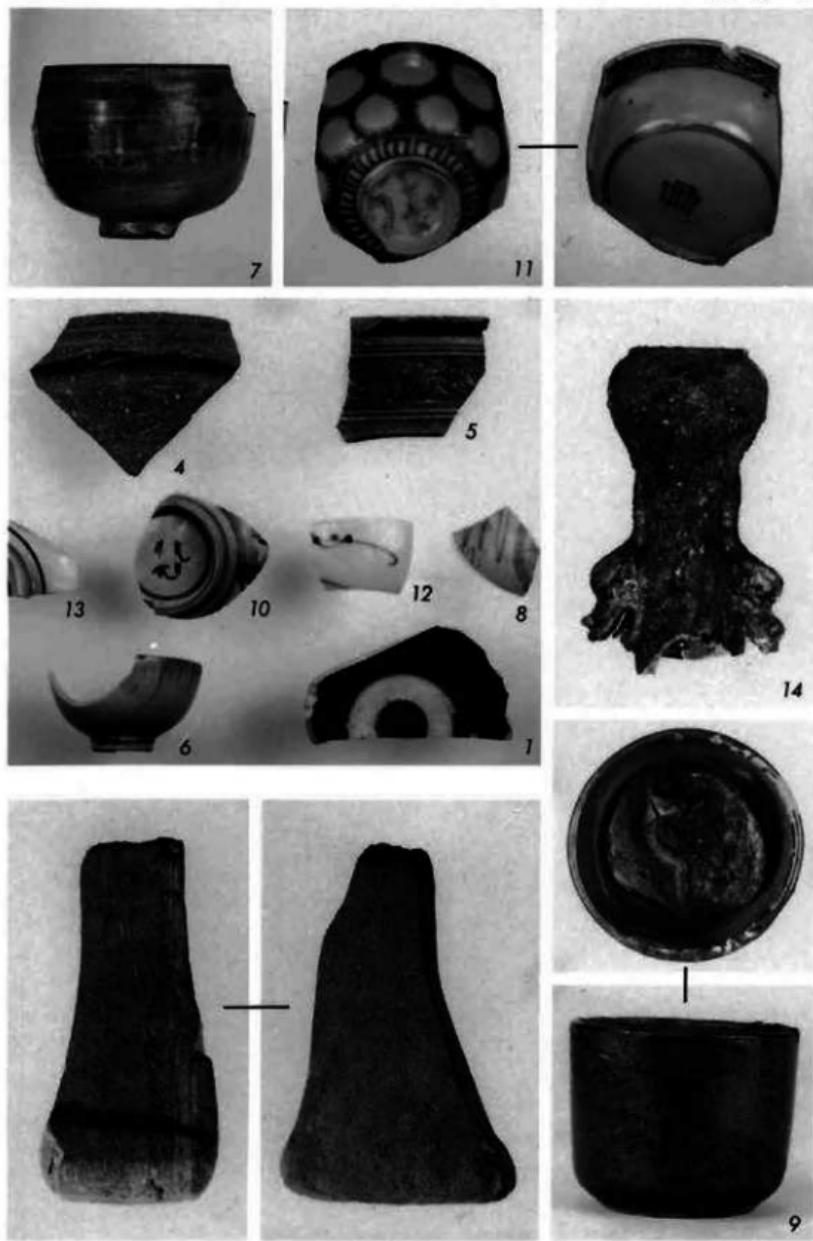
船材



船材



船材 ほぞ穴



出土遺物（陶磁器・砥石）



出土遺物（ガラス瓶）



出土遺物（駅弁関係資料）

兵庫県文化財調査報告 第52冊

1987年8月10日 発行

神戸ハーバーランド遺跡

編集 兵庫県埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市中央区荒田町2丁目1-5
TEL (078) 531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1
TEL (078) 341-7711

印刷 株式会社精文舎
〒652 神戸市兵庫区下沢通6丁目2-18
TEL (078) 575-4729
